

タスマニアの高校から 1

第一回 シドニーで語学研修 ―友だちは中国人

本 田 貴 文

二〇〇九年一月四日に成田空港を出発して、約二時間かけて五日、シドニーに到着した。今年の一二月までこのオーストラリアで語学留学をする。さしあたり、一月六日から二八日までの一ヶ月間はPIEE（国際教育交流協会「留学生派遣団体」）のプログラムで日本人二〇人ぐらいと一緒に語学研修をする。シドニー近郊の May Will English College という学校に通った。College とは言ってもオフィスのような雰囲気、生徒の年齢層も下は一五、一六歳から、上は三〇代のオッサンまでと幅広く、日本の学校というよりは英会話学校に近かった。そこには中国人の生徒がたくさんおり、彼らはもうすでに五ヶ月滞在しているようで、かなり英語が上手かった。

二日目から中国人らのクラスで授業を受けていた僕は、彼らとともに仲良くなった。一日目にテストを受け、日本人の多くは下のクラスだったが、僕は中国人とタイ人だけのクラスに一人だけ入った。最初は少し苦労したがすぐになじめ、昼休みには中国人と昼食を食べに行くなど積極的に英語を話した。May Will から歩いて三分ぐらいのところにある大きなモール（ショッピング・センター）があり、そのフードコート（食堂）で昼食を食べる。欲しいものがすぐ手に入る日本に住み慣れている人たちにとつて、このモールの横で語学研修するのはちょうどいいと思った。

「セブン」という名の中国人留学生

シドニーでのホストファミリーは南米出身の人で、とても気さくな人達だった。彼らはもうすでに何人もの日本人留学生をステイさせているらしく、その写真を見せてくれた。それが理由か、南米出身だから知らないが、簡単な英語を話してくれた。最初にホストマザーに言われたのは「背が高いね」だった。もちろん英語である。意外だった。家にはもう一人中国人のコビー、一六歳がステイしている。

中国人らは留学するにあたって、自分のあだ名をつける。なのでもちろんコビーは本当の名前ではない。コビー・ブライアンからとったらしい(バスケが盛んな中国でコビー・ブライアンはヒーローである)。ほかにも自分の名前が「七」だからSevenとか、辞書から適当に選んでCoraなどいろいろいた。もちろんコビーとも仲は良かったが、彼は休みの日一日中パソコンゲームをしている。それは彼だけではなくほかの中国人の友達もそうだった。聞くに中国ではかなりパソコンゲーム文化が広がっているらしく、一日中パソコンをしているくらいふうらしい。PIEEのオリ



中国人の留学生といっしょに。最後列左が本人。
(シドニーにて)

エンターションでは「自分の部屋にこもっていたらいいけません」と言われたが、コビーは部屋にこもってるし、部屋から出ても特にすることがないので、やはり部屋で本を読んだりして過ごした。ディナーの時間になったら呼んでくれるので全く問題ない。

朝はコビーと一緒にバスで Mary Will に行く。道中にバスから見える海の景色が素晴らしい。帰りに途中下車して写真を撮りまろう。授業では、主にリスニングや文法、英作文を扱った。ビデオを見ながら問題に答えたり、オーストラリアの環境に関するインタビューを聞くもの、一月二十六日がオーストラリアデーだったのでその関係のテキストを使って文法や単語を勉強した。一番最初に覚えた言葉は No idea (わかりません) だった。二週間に一回ぐらいレポートを書く宿題が出た。一つ目のテーマはシェイクスピアについて、もう一つはオーストラリアの環境でグレートバリアリーフについて。どちらも A4 で二、三枚書かなければならなかったのが最初、すこしたいへんだった。日本人の間ではウィキペディア(ネットの辞書的なサイト)が重宝していた。ほかにも英語の本を読む宿題やエッセイを書く宿題がでた。

勉強に関して感じたことは、パソコンがどうしても必要だということである。こっちはレポートを書くにも、エッセイを書くにもパソコンである。ある日、ホストファーザーに「なんでパソコン持つてこなかったの?」と聞かれて、「PIIEが持つていくなつて

言った」と言ったら、「今はホストブラザーのを貸してあげられるけど、次のホストがパソコン持てなかつたらどうすんの？」と言われた。たしかにそのとおりである。もちろん、中国人は全員持っている。日本人の中にも後から親に送ってもらう子もいた。

テストは力を合わせて

毎週金曜日はテストとアクティビティーをすると決まっており、朝テストをして、午後から動物園などにバスで出かける。金曜日は三回あったので、動物園のほか、シドニータワーに行ったのとビーチでバーベキューをした。けっこうのんびりとしている。おどろくべきは、テストのとき。日本人がまじめに受けている横で、中国人が辞書やノートを見たり相談しながらやっている。しまいにはこつちに聞いてくるので、郷に入っては郷に従えである、みんなで力を合わせてやった。放課後は中国人とバスケットをしたり、*Mini Mini*のピンポンルームで卓球をしたりして遊ぶ。帰りたくなったらバスで帰る、という生活。休日もしドニー市内にバスで遊びに行く。

主な交通手段はバスである。電車などない。バスカー

ドをモールで買って乗る。降りるバス停の距離によって、三色あつてそれぞれ値段が違つ。安い方からブルー、ブラウン、グリーンカードである。ホームステイから *Highway 11* まではブラウンだが、シティーまではグリーンを使わなくてはいけない。グリーンはフェリーにも乗れる。ところで、こちではバスを待つていてもバス停に立っているだけでは素通りである。ちゃんと手を挙げるなりして、「乗る」という合図をしないとけない。日本のようにいちいち親切に止まってくれない。ある日、シティーから帰ろうと夜八時ぐらいにバスに乗ろうとしたら、合図が見えなかったのか素通りされた。バスは二四時間走っているが、夜は一時間おきである。しかたなく、独りさみしく寒いな一時間ほどバス停で待つことに。その間、宗教の勧誘に二人、「ライター持っていないか？」と一人に話しかけられた。この研修が終わったら、日本人らはばらばらになり、それぞれの留学先へと旅立つ。僕の次の滞在先はタスマニア島である。これは最近決まったわけではなく、日本を出発する一ヶ月ぐらい前から決まっていたので、すでにクリスマスカードを送ったり、ホストマザーと何回かメールをしたりしていた。タスマニアにはもう

一人、日本人が行くことになった。中には研修中にホストが決まる人もいるが、彼なんかはそのパターンだった。そうすると、家族構成が分らないので、日本からおみやげを持っていくときに困るらしい。決まらないということはないらしいが、ホストファミリーの雰囲気はできるだけ早く知っておくにこしたことはない。

一月二十九日、前日に *Highway 11* を卒業し、シドニーのホストと別れ、ついに本当の留学先タスマニアに行くのかとどきどきしていたら、(シドニー市内の)コロイセンターとかいうところに連れていかれ、交換留学生のオリエンテーションを受けることに。しかも三日間そこに泊まるという。日本人らはひとりもそのことを聞いていなかった。もしくは、英語を聞きとれなかったか。そこにはドイツ人やブラジル人などさまざまな国からの交換留学生が集まってきて、一緒にオリエンテーションを受けるわけだが、オリエンテーションの内容は日本で受けたものとはほぼ同じ、しかも英語だから全然わからない、さらに多すぎる待ち時間に、日本人らは辟易。シドニーのホストファミリーと涙の別れをした手前、次の場所に行くなり、前のホストに戻るなりしたいと苛立つ。初めて会った人たちとの突

然の狭い部屋での寮生活に慣れていない日本人たち。しかも崖になっていて逃げられない。三日目、なぜかシティーに行くことになった。数日前にオーストラリアに来たばかりのほかの国の人にとっては初めてのオペラハウスだが、日本人らは数回目で辟易した。ここぞとばかりに中国人らとシティーで待ち合わせをし、ビーチで遊ぶ。「日本に行くから」、「中国に行くから」と最後の別れをした。おそらく次に会うのは一年後である。彼らとは今もメールのやりとりをしている。

タスマニア島に上陸

シドニーからメルボルンまで二時間、そこからさらに二時間かけてデボンポートに着いた。あの「飛行機とゲートをジョイントするやつ」なんてもちろんない。ちっちゃい飛行機から降りて、自分で滑走路を歩く。そこには日本の駅より小さなエアポートがあり、ホストマザーとホストブラザー、ホストシスターが待っていてくれた。車で家まで行くあいだ、ひつじと牛がチラチラ目に入ってくる。本当に田舎に来たと実感した。デボンポートはタスマニアの北部に位置し、タスマニアの中で三、四番目に大きな町である。そこから

西に車で二〇分、フォースというところに僕のホームステイはある。ここは本当に田舎の真ん中で、ポール・マッカートニーに Heart of the Country という歌があるが、まさにそんな感じである。窓からはやはりひつじと牛が見える。近くに唯一あるのが Detroit Steer (ニョガソリンスタンド) である。こっちのガソリンスタンドは日本のコンビニのようなものも含んでおり、チップスなどが買える。幸い ATM もそこにある。

さつそく次の日から学校に行くのかと思ったら、タスマニアはオーストラリアのほかの地域と違ってターム(学期)が三つしかない関係で、一週間遅れて二月一〇日から学校がスタートする。思いがけず一週間の休みを得た僕は、終日だらだらした。家にはビリヤード場があり、いい感じである。一ヶ月ばたきと過ごしたシドニーと違って、こっちでは一日がゆつくりと過ぎていくような気がする。都会の喧噪にうんざりしていた僕にとってはちようどよかった。(つづく)

(ほんだ たかふみ・東京都立三鷹高校三年、オーストラリアに交換留学中)